

1 ベと病

A 生態と防除のねらい

- 1 晩秋および春期の低温多湿時に発生が多い。密植などにより通風採光が悪いと発病を助長するので間引きは早めに行う。
- 2 収穫時には被害葉をほ場に残さないようにする。
- 3 発病しやすい時には発生に注意し、発病初期から薬剤防除を行う。

B 耕種的防除法等

- 1 間引きは早めに行い、通風採光を良くする。
- 2 適正な肥培管理を行う。
- 3 発病葉の処分を行う。

2 萎黄病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害株の組織とともに土中に残り土壌伝染する。高温期に発生が多いが、は種後1か月の平均地温が25℃以上のときに被害が大きいため、秋まき栽培はできるだけ晩まきする。
- 2 発病ほ場ではダイコンを連作すると被害が増大するので連作を避ける。他のアブラナ科作物との輪作も避ける。

B 耕種的防除法等

- 1 耐病性品種を栽培する。
- 2 連作を避け、多発ほ場では3～4年間アブラナ科以外の作物を栽培する。
- 3 秋作ではできるだけ遅まきする。
- 4 被害残さの処理などほ場の衛生管理に努める。

3 根腐病（亀裂褐変症）

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害残さや菌核などで土壤中に残り、伝染源となる。
- 2 主に夏ダイコンで発生が多い。特に多雨期に肥大～収穫期を迎える作型で被害が多いので、このような作型ではほ場の排水対策を十分に講じておく。
- 3 連作すると年々被害が増大するので、発病ほ場では連作を避ける。

亀裂褐変症



B 耕種的防除法等

- 1 連作を避ける。
- 2 ほ場の排水を良くする。
- 3 被害残さの処理を行う。

4 黒斑細菌病

A 生態と防除のねらい

- 1 ダイコンの他ハクサイ、キャベツにも発生する。病原細菌は、種子や土壌及び被害植物について越冬する。病原細菌が風雨等によって飛散し、作物の自然開口部や傷口から侵入する。
- 2 春と秋に発生が多く、温暖多雨のとき多発する。発病期には発生に注意し、予防防除を徹底する。
- 3 早まきや砂質土で発生が多い。また、生育が衰えたときに発生が多いので、肥料切れしないように肥培管理を行う。
- 4 常発地では2年輪作をすると発病を減少させることができる。

B 耕種的防除法等

- 1 連作を避け2年輪作をする。
- 2 早まきを避ける。
- 3 肥料切れしないように肥培管理を行う。

5 軟腐病

A 生態と防除のねらい

- 1 一般に夏期に発生が多いが、春・秋にも温度の高いときには発生する。また、降雨が多いと多発するので、ほ場の排水を良くし、予防防除に重点をおく。
- 2 病原細菌はきわめて多犯性のため、マメ科、イネ科などの作物と輪作し、連作を避ける。
- 3 キスジノミハムシ、ヨトウガなどの食害痕からも侵入するので、害虫の防除を徹底する。

B 耕種的防除法等

- 1 連作を避ける。
- 2 ほ場の排水を良くする。
- 3 被害株を処分する。

6 ウイルス病

A 生態と防除のねらい

- 1 モザイク病は、主としてカブモザイクウイルス (TuMV) によって引き起こされる。ウイルスはアブラムシ類により伝搬される。
- 2 幼苗期に感染したもののほど被害が大きいので、ソバなどの間作をするか、プラスチックシルバーフィルム等によるマルチ栽培を行い、アブラムシの飛来を防止する。
- 3 品種により耐病性にかなりの違いがみられる。

B 耕種的防除法等

- 1 耐病性品種を選ぶ。
- 2 障壁作物を間作する。
- 3 プラスチックシルバーフィルム等によるマルチ栽培を行う。

C 薬剤防除のポイント・注意事項

媒介虫の防除(アブラナ科虫害の項を参照)。

TuMV : アブラムシの防除を行う。